

2019 年 1 月 10 日追記版

丸紅欧州会社

国際調査チーム 松原 弘行

二代伊藤忠兵衛の英国での足跡を訪ねて ～住居、留学先、英国観

2018 年 12 月 29 日の産経 WEST¹で、伊藤忠商事（株）と丸紅（株）のルーツとして伊藤忠兵衛記念館が紹介されている。この家で生まれた二代伊藤忠兵衛（本名は精一。以下、忠兵衛）は、母親らの強硬な反対を押し切って留学のため英国に長期滞在²している。今回は忠兵衛の英国での足跡について紀行文的に報告したい。なお本稿作成にあたっては、滋賀大学経済学部の宇佐美英機教授が読みやすく再構成してくださった『本部旬報』、及び先生のその他のご研究³をたいへん参考にさせていただいた。

1. 英国留学の決意と渡航実現まで

忠兵衛は腸の病気で入院している間に、全く新しいこと（今で言えば、イノベーション）を興すには海外で見聞を深めるしかない³と決意した、という：「とにかく店の総てを合理的に変えるには、何か大きな勢いに乗らなければダメであることを思いついた。そのためにもまず洋行して新知識を得るべきだ」（『回想録』）。周囲は、社業のことや結婚のタイミングを理由に猛反対し、忠兵衛の持つ英語の雑誌等を残らず処分してしまったそうである。英語の辞書だけは隠し持ち続けることに成功した忠兵衛は、自分の知っている日本語の名詞を全て英語でも覚えようと努力し、特に魚類の名前は全て英語で覚えていた、と言っている。

こうした衆人環視の下では留学準備は不可能と考えた忠兵衛は奇策を講じた。当時苦境に陥っていた上海法人を自らの手で閉鎖するとの大義名分で日本を出国し、閉鎖手続きが完了したら、香

¹ 【関西企業の DNA】「商売は菩薩の業」 伊藤忠と丸紅の祖 初代と二代伊藤忠兵衛 - 産経ニュース <https://www.sankei.com/west/news/181229/wst1812290002-n1.html>

² 1909 年 4 月 17 日天洋丸で横浜発～5 月 3 日サンフランシスコ着～5 月中にニューヨーク着。
1909 年 7 月、モリタニヤ号でニューヨーク発～7 月 20 日リバプール、翌日ロンドン着。
1910 年 9 月 3 日加茂丸でロンドン発～10 月 18 日神戸着

ちなみに、タイタニック号沈没事故が起きたのが 1912 年である。

³ 本稿で参考にさせていただいた宇佐美教授のご研究の主なものは、次のとおり：

○「二代伊藤忠兵衛（精一）のイギリス滞在にかかる『本部旬報』記事」
滋賀大学経済学部ワーキング・ペーパー 203 号（2013 年）

○「二代伊藤忠兵衛のイギリス滞在時の通学先について」
滋賀大学経済学部附属資料館研究紀要第 47 号
<https://marubeni.box.com/s/iuo96ra3icyxfax0bitd1zmh6j2sx61z>

以上に加え、上記ご研究が参照されている以下の資料も参考にし、引用させていただいている：

○伊藤忠兵衛翁回想録編集事務局編『伊藤忠兵衛翁回想録』伊藤忠商事（株）1974 年
○日本経済新聞社編『私の履歴書 経済人 1』（1980 年）

港経由で英国に向かおうとしたのである。しかし、この奇策が実行されることはなかった。上海のスタッフから懇願され、自分のポケットマネーまで投じて存続させたからである。日本にいったん帰国した忠兵衛は、上海法人の業績改善を確かめてから米国経由で渡英した。

米国では「英国は今がピークで、これからは米国の時代だ。英国行きを中止して米国に残れ」との忠告を受けたが、忠兵衛の決意は固く、予定どおりロンドンに向かった。

忠兵衛がロンドンに着くと、先回りして到着していた母からの手紙には次のようなことが書いてあったという：「**せっかく行ったのだから、心行くまで勉強して、帰れ。見物も上の空ではなく、落ち着いて見て、帰れ**」（『回想録』）。忠兵衛は、あれだけ反対したくせに、これこそが母の真意であったか、と感動したようである。

なお、忠兵衛が日本に帰国して後の 1910 年 10 月 25 日、各店幹部を本部に集めて、欧米視察談を開催している。時の経つのも忘れ、16 時から 22 時までの 6 時間にわたったという。

2. ロンドンでの住居

ロンドンの地下鉄（Underground）にサークル・ラインという路線があり、この内側を東京の山手線（南北 15km、東西 7km）内と同様の都心部と見立てるなら、ロンドンの都心部（東西 8.6km、南北 3.2km）は、山手線内を東西・南北ともに 1/2 に縮めて（面積は 1/4）、右に 90 度回転させたような形・広さである。この喩えでは、文京区のあたりがシティと呼ばれるロンドン金融街で、丸紅欧州会社のオフィスもシティにある。

忠兵衛は 1909 年 7 月 21 日にロンドンに到着後、市内で何度か転居しており、その住所とその場所にある現在の建物は以下のとおりである。①は Beatles の Abbey Road Studios のやや西側で、東京で言えば東急目黒線の洗足や奥沢エリアに相当するような古い住宅街である。②はロンドン市内北部の Regent's Park の少し北側、東急新玉川線の桜新町（渋谷から、駒沢オリンピック公園や球技場を過ぎて、大きな商業施設のある二子玉川駅の少し手間）エリアに相当し、ロンドンでも単身者を中心に日本人駐在員が多く住んでいる。③は「山手線内」ハイドパークの北側で中華系の住人や商店も多いエリアで、在日中国大使館にも近い麻布エリアに相当しそうだ。

①. 83 Randolph Ave. (旧 Portsdown Road) [Maida Vale]



122 Fellows Road [Swiss Cottage]



②. 10 Queensborough Terrace [Bayswater]



1909 年 9 月頃の忠兵衛の日課について「午前はタイムス、フィナンシャルニュースを閲読し、午後は訪問もしくは日本の書籍を耽読し、もっぱら研究」と『本部旬報』に述べられている。

3. ロンドン市内及び近郊での忠兵衛の立寄先

- ①. 忠兵衛は「渡英早々、紡織機を始めとする機械類製作の将来性に着目したので、英国で精一杯勉強したい。例えば、鉄の質とか、熱処理の方法、或いは機械製造の技術語を覚えることに努めた」（『回想録』）。9月に入って「家業の織物の仕事もあるから、有名な大学をさけて」（『私の履歴書』）ロンドン大学の講義にもぐりこんで聴講したところ、全く理解できなかったと語っている。一方で、教科書を読めば内容は大半理解できたそうで、それ以後は基本的に独学で勉強したとのことである。筆者の米国ビジネススクール留学の経験に照らして考えると、欧米の大学では教科書は独学で予習してから授業に臨むことになっていると思われ、忠兵衛がいきなり授業に出たとすれば内容が理解できなかったのは当然と思われる。

なお「ロンドン大学」という名前の大学は実際には存在せず、ロンドン市内の主だった大学が「ロンドン大学」という連合体（写真上左の看板）を構成している。従って、忠兵衛が実際に授業に参加した学校を特定することはできないが、俗に「ロンドン大学」という略称で呼ばれやすい学校に University College of London（写真上右）、London School of Economics（写真下）がある。



- ②. 忠兵衛は、彼の滞在中にちょうど開催された日英博覧会について、厳しく批判していたことが『本部旬報』の記事からわかる。日本が日英同盟の勢いで国を挙げて真剣に取り組もうとしているのに対し、英国側は政府が特段の関与をせず、シェハーード・ブッシュ・エステート

インブルーピングという民間企業が、先年の英仏博のために造成したホワイトシチーという博覧会場を流用して開催するエンターテインメント企画のような扱いだったということで、具体的には、ハリボテ式の鳥居・山門、提灯、チョンマゲ式だ、と忠兵衛は批判している。

この日英博の開かれた White City / Shepherds Bush（上出の喩えに合わせれば、蒲田駅前）一帯は、最近再開発されて欧州最大のショッピングモールが建設されている。その中には、これも欧州最大の日本食品販売店「Ichiba（市場）」が入っていて、日本食材を潤沢に扱っている。自分の会社が日本から輸入するビールが、日英博の会場跡地で販売されているとは、忠兵衛も予想しなかったに違いない。



③. 1910 年夏、忠兵衛はケンブリッジを見学に行っている。『本部旬報』の記録によれば、

「6 月の 15 日は村君、西村君と打ち連れてここ劍橋（ケンブリッジ）大学を見物に來たり申し候。当地は牛津（オックスフォード）と並びて世界最古の大学にて、英國の碩儒（大学者）、大政治家、総てはこの 2 校より輩出したりとのことに候。ケンブリッジ大学は各分校にて組織せられおり申し候。その内のキングスカレーチは建築最美にて、また程高き様子に候。さすがは古いこと好きなこの国ゆえ、新しきことを教ふる大学も建築その他古く、見るから歴史に富んだところと見受けられ候。校庭広く、幽邃（ゆうすい。奥深く静かな）な河辺、実に心地よく、ここで 3-5 年くらい勉強したき思い致し候。」（一部を現代語に修正している。以下の引用においても同様）

と、今日のガイドブックの解説と比べても正確な記述がなされている。ケンブリッジまでは特急列車で北に約 1 時間である。今でも忠兵衛の語ったとおりの景色を見ることができる。

キングス・カレッジの正面

キングス・カレッジ校内の大礼拝堂の荘厳な内部⁴

キングス・カレッジの校庭



ケンブリッジの河辺



4. 忠兵衛が学んだブラッドフォードとその周辺

忠兵衛はブラッドフォードのポリテクニクという日本の旧制中学程度の学校に通い、英語の勉強の「暇を見つけては、紡績織布、蒸気発電や自動車科の特別レッスンに通」った（『回想録』）。「蒸気機関や発電となると最初シャベルで 20 時間石炭炊きをやらされ、次いで水管式ボイラーを扱う。発電所でタービン解体の日は先生に引率されて解体に立会い、インパルスの原理を示してくれる」（『私の履歴書』）等の実習に参加している。当時はようやく自動車のはやりだした頃で、ガソリン車が現れた頃だったそうだ。織機は学校に 10 種くらい設置されていた他、同級生の案内で工場見学は自由にできたとのことである。

実はこの名前のおりの学校は実在していないが、滋賀大学経済学部の中野英機教授のご研究（前出の注 2）によれば、ブラッドフォード・テクニカルカレッジ（現ブラッドフォードカレッジ）であった可能性が高いとのことである。忠兵衛は当時の主力商売であった繊維商売でリーズ、ブラッドフォード、マンチェスター⁵を頻繁に訪ねており、彼が目にしたであろうそれらの街の景色を紹介すると次のとおりである。

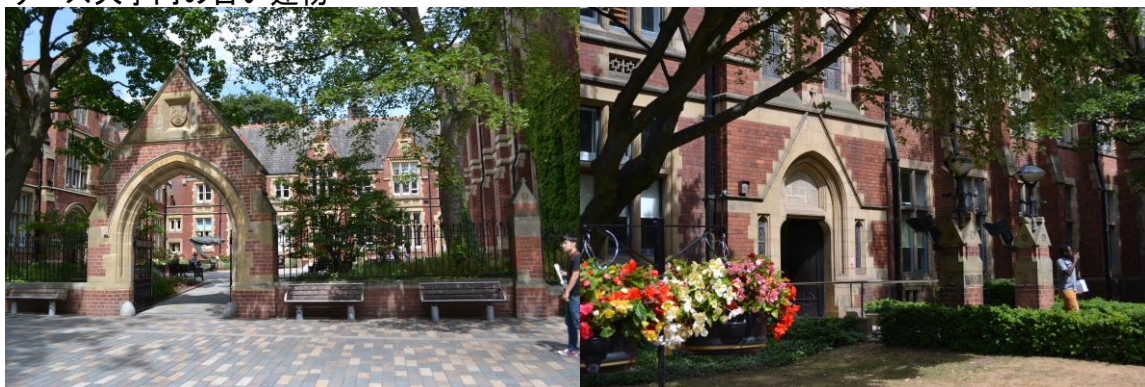
⁴ この絵画はルーベンスの「東方三賢人礼拝の図」

⁵ 当時大阪が「東洋のマンチェスター」と称された如く、綿紡績等の繊維産業の世界的中心地だった。

マンチェスター市庁舎（写真提供：現地に出張された丸紅（株）元社員）



リーズ大学内の古い建物



リーズ大学前の住宅地（恐らく当時のまま）



リーズ市役所



リーズ博物館



当時のリーズの街並みと地元工業製品



ブラッドフォード市庁舎



現存するブラッドフォード羊毛取引所の建物



忠兵衛が学んだと推測される建物（ブラッドフォードカレッジ、Old Building）



忠兵衛も目にしていたであろうブラッドフォードカレッジ前の街並み



ブラッドフォードカレッジ
Advanced Technology Centre

今留学していたら忠兵衛はこんな施設に入り浸って最新技術に目を輝かせたのではないだろうか。



5. 忠兵衛の英国観

ロンドンに到着した直後の忠兵衛からの手紙で、英国にて特に感じたこととして、彼は次のように伝えている：「英国人が、いかなる人、いかなる物に対しても「真実の温情」を以て接するを見て深く感激した。是非広く店員諸君に告げ、その心がけあるように」（『本部旬報』）

ロンドンのクリスマスについては、概ね次のように語っており、同様に初めてのクリスマスを過ごしたばかりの筆者にとっても味わい深い：「諸事簡潔を旨とする西欧諸国では、物の贈答、虚礼の応酬などはないはずと思っていたのに、なんとこのクリスマスのみは何の因果か世の中の諸事万端の決済期、ちょうど日本の盆・正月・祭りが一度に來たようなもの。このクリスマスが政治・経済・社会の全般に大影響のあることは想定外で、実は昨今好んで用事を作って忙しがつている私は、この機会を利用してこのような際の人心・社会の機微をうかがい知りたいので、たびたび世の尻馬について幕の風にさ迷わされた次第である。しかしながら、その当日クリスマスのそれは案外にも案外なもの、12月25日の当日は知人の見送りに午前を費やし、午後は静かな曇りで読書や閑談に時を費やし、ただ夜のわずかなディナーに例の七面鳥とローストビーフなるクリスマスお決まりの祝い物を食べてにぎやかに食事を終わり、食後ホールで音楽を聞くかトランプ遊びくらいが愉快の頂上。元来が宗教の祝日とはいえ、もはや今日キリスト教国民の欧米全土は国際的・国民的な大祝日にも拘わらず、交通はほとんど休止し、芝居その他の歓楽は場末かクリスマスのパントマイムの2-3時間くらいが関の山であるあるから、勢い、人心を新たにしようとすることもできないというあんばい」

Festive opening times for this station

This station will open and close at the following times during the festive period:

	Open	Close
24 December	04:45	00:40
25 December	No service	
26 December	07:00	00:56
27 December	04:45	00:56
28 December	04:45	00:56
29 December	04:45	00:56
30 December	06:30	00:40
31 December	04:45	00:56
1 January	All night service	
2 January	04:45	00:56

MAYOR OF LONDON

TRANSPORT FOR LONDON

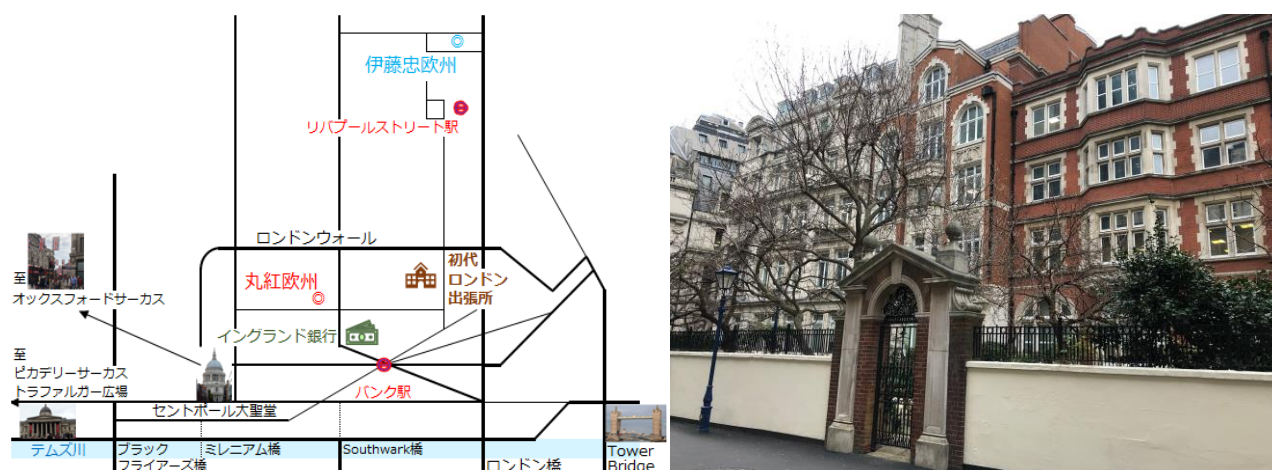
1910年5月下旬、忠兵衛は「およそ一国を評せんと欲せば、その国語に通じ、習慣に馴れ、さらにその国の歴史・政ごと・宗教・社会制度・地勢等に精通した後にあらざれば、容易に口を開くべからず」等と十分に前置きをした上で、ドイツを中心に各国についての考え方を各店に周知している。ドイツ視察に費やしたのは40日間、旅程3,500km、足を止めた大都市は19カ所、工場視察7カ所、博覧会視察も7カ所、博物館は30カ所以上だったとのことである。ドイツとの比較において、英国については次のように評しているが、現在でも当てはまる点がとても多いことに驚く：「英国に至っては、国に永い秩序のある19世紀の初期以来、蒸気動力の実用を率先して文明機械を独占的に利用して來た。有名な自由主義が極端な商工業偏重主義に傾いた結果、国民の本位である中等国民の階級を失い、重農主義を否定するものとなり、健全な国民を失ってしまった。大英国民の特徴である剛健不撓（ふとう。どんな困難にも屈しない）の精神はここから生じている。今日では卓絶しているというのに、そこが英国の大英国なところで、国民人種に先天的な点、歴史習慣を重んずる点、常に對外思潮を固める点、英国の天候、その他の事情が大英国民に常に穩健剛健の氣を養い、他の国民が滔滔（とうとう。流れ続ける）浮薄な時潮に際して、尚よく巍然（ぎぜん。抜きん出て）として超絶卓越するところである。既に数十年前、社会の根本組織上、中等社会を失ったこの国家の勢いとして、資本家は資本家、労働者は何代もその父祖の業を継ぐべき運命を負って生まれて來て、50年、70年コツコツとその天職を甘んじて遂行するのだ。その結果として、富める者はますます富み、労働者は次第に生活難に苦しみ、『貧しき劣れる者は亡ぶ』のことわざどおり、身体上の素質まで劣り、今日既にその傾向はますます甚だしい。

その結果、労働者救済問題、養老金問題が数十年前より政府の事業として企てられている。その結果、働かずに食べられるすべを得た者は、次第に悪習慣になじみ、今日アンエンプロイメント問題として社会の大問題となり、この種の遊食者がロンドンでも実際に通りに満ちていて、初めての渡英者がロンドンで、労働者でもなく乞食とも思えない無邪気な浮浪者たちの多さを見て驚くところだ。これは英国の極端な自由主義、商工偏重主義の悪結果であり、この弊害の影響は極めて多く、政治・財政・教育・軍事に及ぼしつつある。以上、経過並びに実状をまとめれば、既往産業政策は社会政策を無視して来て、今日社会組織の完全性を欠き、国家は社会の救済と社会の改造とに苦心しつつあるのである。（中略）英国の公開主義更に言論を圧しないためか、はたまた社会の世論の向かうところが直に政治上に表れるためか、数十年来極端に言論の衝突はなかったが、最近における対ドイツ軍備問題、自由だ保護だの大主義の論戦がようやく盛んになって、その影に付きまとして絶えず為政者を悩ますのは社会問題である。即ち有名なる本年の大蔵大臣ロイドジョージ氏の富豪対抗予想、自由党内閣アスクイス首相の苦戦、上院が大混戦の挙句停会、来年1月8日の解散（確定）、15日の総選挙の如きは、実に社会問題の1点に起因するに他ならない。最も穏健で社会主義が比較的伝播しないと思われた英国でも、このような状態だ。何国も同じ社会主義病に感染している。ただ大小厚薄の差異があるだけだ。」

6. 番外：初代ロンドン出張所、忠兵衛が経由した米国の景観

こうした英国留学経験について、忠兵衛は「私の一生を支配したものの1つに、外国行、ことに英国留学がある」（『私の履歴書』）と記している。なかなか含蓄の深い足跡めぐりであった。

【2019年1月10日追記】初稿公開後に宇佐美教授からお知らせいただいた情報によれば、忠兵衛の帰朝後の1919年に初代ロンドン出張所がThrogmorton通りのDraper's Hall内に開設されたとのことである。現在の伊藤忠、丸紅両オフィスに睨みが利きそうな場所である。



最後に、忠兵衛が行きを経由した米国内で目にしたであろう景色の写真を紹介する。なお、サンフランシスコには初代忠兵衛の頃に支店があった⁶が、この頃にはいったん閉鎖されていた（サンフランシスコ中心部のユニオンスクエアの東側2~3ブロックのあたりで3カ所ほど移転していたらしい）。

⁶ 滋賀大学経済学部附属資料館研究紀要第44号 宇佐美英機「『日本雑貨貿易商会』支店探訪記」による

サンフランシスコ湾入口のアルカトラズ島
（この刑務所には後にアル・カポネも収監された）



サンフランシスコ
ケーブルカー起終点の転回所



大陸横断鉄道の通過するコロラド州の雄大な景色
（正面の山の左端に、サンタの追尾でも有名な NORAD
北米航空宇宙防衛司令部が設置されている）



ニューヨーク五番街の
セントパトリック教会
（撮影：丸紅米国会社・黒岩氏）



（国際調査チーム） Email: Matsubara-Hiro@marubeni.com Tel: +44 (0) 20 7826 8756

- ・ 本資料は公開情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性、相当性、完全性を保証するものではありません。
- ・ 本資料に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するもので、当社は何らの責任を負うものではありません。
- ・ 本資料に掲載している内容は予告なしに変更することがあります。
- ・ 本資料に掲載している個々の文章、写真、イラストなど(以下「情報」といいます)は、当社の著作物であり、日本の著作権法及びベルヌ条約などの国際条約により、著作権の保護を受けています。個人の私的使用および引用など、著作権法により認められている場合を除き、本資料に掲載している情報を、著作権者に無断で、複製、頒布、改変、翻訳、翻案、公衆送信、送信可能化などすることは著作権法違反となります。

Marubeni Europe plc
Registered in England and Wales: No. 1885084
Registered Office: 95 Gresham Street, London, EC2V 7AB, England
Website: www.europe.marubeni.com